

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 七 | G01 - 04 |
| | 令3.278集 |
| | 国語 - 高 |

物語文を多面的・多角的に読み取ることができる生徒の育成

——副教材を用いた表現の工夫や特長に着目する活動を通して——

特別研修員 小久保 佑亮

I 研究テーマ設定の理由

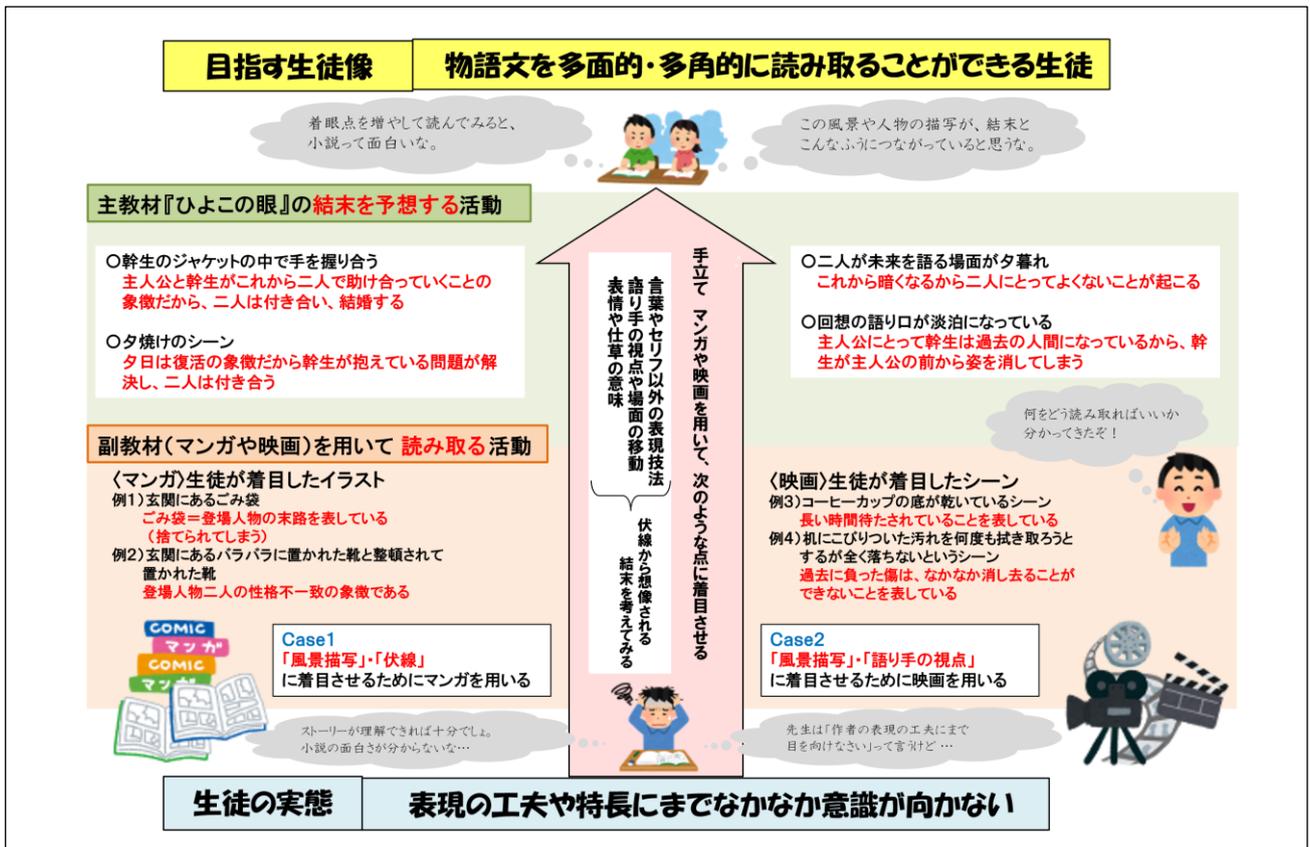
来年度から年次進行で実施される新学習指導要領では、高等学校国語科の科目が刷新され、「論理国語」と「文学国語」が新設される。この中の〔思考力、判断力、表現力等〕の指導項目では、「語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈する」とあり、生徒たちには、文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について学ぶことが求められる。

研究協力校の生徒は、自ら問題や課題を発見したり、更に深く掘り下げて追究したりすることを苦手とする生徒が多く、文章を読んでも事実の確認や書かれた内容の表層的な理解に留まり、作者の表現の工夫や特長にまで意識が向かない傾向が見られる。

そこで、作品中の表現や叙述に着目して読み、気付いた表現を手掛かりにしながら、因果関係を読み取る活動や先の展開を予想する活動を取り入れることで、多面的・多角的に読み取る力を育みたい。また、作品の学習内容と関連させながらマンガや映画を副教材として活用することで、表現に着目した読み方を更に強化したい。生徒たちが、このような表現の工夫や特長に目を向けられるようになれば、主体的に作品と関わる姿勢を身に付け、作品の解釈がより一層深まると考え、上記のテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

生徒が叙述や表現の工夫に着目し、多面的・多角的な読みや作品理解をより深めるための方法として、以下のような手立てを通して授業改善を図ることとした。

手立て1 副教材を活用して、言葉やセリフ以外の表現に着目させる。

副教材としてマンガ又は映画を用いて、表情や仕草の意味、語り手の視点や場面の移動など言葉やセリフ以外の表現の工夫や特長を読み取る活動を行う。生徒はマンガや映画から気付いた表現や予想した結末をアンケート作成ソフトに入力し、共有する。マンガや映画を用いることで、生徒たちは「何をどう読み取ればよいか」という表現に関する着眼点について視覚的に理解することができる。

手立て2 主教材の叙述や表現を手掛かりにして、物語の結末を予想させる。

主教材の結末部分について、ハッピーエンドとバッドエンドの二とおりの結末を考える。その際に、予想した結末の根拠となる叙述や表現も併せて答えることで、「何となく」や「勘」で答えるのではなく、どのような表現に着目したのかという点に意識が向かうようにした。その後、4～6人のグループ活動を行い、話し合いの中で出てきた興味深い考えや共有したい意見について電子ホワイトボードを用いて、クラス全体で共有する。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 副教材にマンガや映画という視聴覚教材を取り入れたことで、「風景描写」や「語り手の視点」という着眼点が強化された。授業の振り返りアンケートの結果を見ると、マンガや映画を副教材として用いたことは、風景描写が登場人物の心情とリンクすることや先の展開を示唆する伏線となっていることの具体的なイメージ形成や構造の理解に有効であったと言える。
- マンガや映画を副教材として取り入れたことで、生徒は表現の工夫や特長に容易に気付くことができ、その表現の効果まで考えられるようになった。コンテクストを基に、様々な側面から自分なりの読みを形成することができ、主体的に文章と向き合い、作品理解をより深めることができていた。

2 課題

- 映画を観て気付いた表現や予想した結末について発表し合う活動は、2～3時間の授業時間を割いてしまうので、肝心の主教材の展開や既習した内容を忘れてしまう可能性があり、授業時間の費用対効果という観点で改善の必要がある。そのため、マンガや映画を副教材として用いる場合には、「単元でどのような力を身に付けさせたいのか」「どのような意図で副教材を用いるのか」という授業や単元のねらいを常時生徒に意識させる工夫が必要になる。

実践例

1 単元（題材）名 「小説を読む（一）『ひよこの眼』」（第2学年・2学期）

2 本単元（題材）について

本単元では、作品中の様々な表現の工夫や特長に着目し、物語文を多面的・多角的に読み取ることができる生徒の育成を目指す。物語文の中で気付いた表現の工夫や特長を基に、先の展開を想像したり、登場人物の心情をよりよく理解したりすることを学ぶ。今回扱う教材は、意外な結末の伏線となる表現や多様な解釈が可能な表現が多くあり、読み手である生徒たちは結末を予想する上で、様々な表現の工夫や特長に着目することができる作品である。

1学期に学習した『デューク』という作品では、結末につながる伏線の役割や風景描写の読み取り方について学んだ。また、マンガのイラストから結末を想像する演習を行ったことで、風景描写について着目できる生徒が見受けられるようになった。しかし、これは教師が提示したもの（マンガのイラスト）に対して反応しているだけであり、生徒自らが表現に着目し、発見したとは言えない。そこで、本単元では、映画鑑賞や本文読解において、様々な表現の工夫や特長に触れ、それらを自ら発見し、結末を予想する活動を行うことで、作品中の表現に意識が向かうようにした。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

| | | |
|--------------|---|---|
| 目標 | 山田詠美の短編小説集『晩年の子供』に収録された「ひよこの眼」を読むことを通して次の事項が身に付けられるようにする。 (1) 言葉を手掛かりにして登場人物の心情を理解したり想像したりすることができる。 (関心・意欲・態度) (2) 物語上、重要となる表現を自ら見付け出し、それらを基に結末を想像することができる。 (読むこと) (3) 物語の語り手である「私」の発話位置を意識し、回想形式という小説の構成を理解することができる。 (知識・理解) | |
| 評価 規 準 | (1) 小説を読む際の基本的な読解方法を身に付けようとしている。 (2) 表現の工夫や特長について、具体的な描写に着目し、それらがどのように作用しているかを考えている。 (3) 回想形式で始まることを意識し、小説全体の構成を考えている。 | |
| 過程 | 時間 | 主な学習活動 |
| つかむ | 第1時 | ・作者の山田詠美のプロフィールとその作品の特徴について理解する。 |
| 追究する | 第2時 ～3時 | ・回想形式で書かれる小説の構成に注意を促しつつ、場面の移動や語り手の視点の移動を意識させながら本文を読解する。 |
| | 第4時 ～5時 | ・映画を観て、気付いた表現の工夫や予想した結末について配信されたアンケートに入力する。 |
| まとめる | 第6時 (本時) | ・前時の活動を本文の読みにも生かして、本文中の叙述を根拠にして小説の結末を予想する。 |
| | 第7時 | ・結末を理解した上で、本文中の表現の効果について再度振り返る。 |

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全7時間計画の第6時に当たる。本時のねらいは、「物語文を多面的・多角的に読み取る」ことである。これらを達成するための手立ては、以下のとおりである。

手立て1

映画における様々な表現に気付き、結末を予想する活動をさせることで、そのようなプロセスを本文の読みにも生かして、物語文の結末を予想させる。

手立て 2

本文の叙述を根拠にしたハッピーエンドとバッドエンドの2パターンの結末を予想させ、グループで発表させる。気付いた表現の工夫や特長について考えを共有し、物語文の読みを深める。

注) 前単元 マンガを用いて、風景描写の効果を確認させる。

前単元では、マンガのイラストを用いて、登場人物の心情やストーリー上の展開などを予想させる活動を行った。また、生徒が気付いた表現や予想した考えなどを電子ホワイトボードに投影して発表し合うことで、一人では気付けない表現やその効果について確認した。

4 授業の実際

(1) 前時まで

生徒たちは、単元の第1時で作者の山田詠美の作品の特徴について学んだ。その中で本単元が収められている『晩年の子供』が、子供から大人になるために直面する現実とその受け止め方について描かれた作品であることを確認した。第2～3時では回想形式という小説の構成と登場人物の心情について理解した。第4～5時では映画鑑賞を通して表現に着目して結末を想像し発表する活動を行った。そこで表情や仕草、風景描写など様々な表現が登場人物の心情を理解したり結末を考えたりする上での材料になることを実感した。

(2) 導入

図1のように前時の映画鑑賞で気付いた作品中の様々な表現や予想した結末について入力したアンケートの回答で表計算ソフトを作成し、プロジェクトで投影して紹介した。興味深い回答をした生徒には、「どのような表現に着目し、そこから何を考えたのか」という思考のプロセスを確認した。

(3) 展開

導入で確認したプロセスを小説の読みにも生かして、作品中の表現や叙述に着目して結末を予想する活動を行った。まず、生徒たちは、図2のようにICT端末に配信されたアンケートに予想した結末とその根拠となる表現について回答をした。次にICT端末を持ち寄って、4～6人のグループに分かれて、自分が気付いた表現や予想した結末について意見交換を行った。その際にただ予想した結末を発表するのではなく、「なぜそのような考えたのかを、本文中の表現を根拠として理由を述べる」よう生徒に指示をした。その結果、生徒の、自分が着目した表現や叙述とそこからどのように結末を導いたのかという思考のプロセスについて説明している姿を見取ることができた。その後、グループの代表者は配信された電子ホワイトボードに話し合い活動の中でグループから出てきた興味深い考えや共有したい考えについて入力をした(次ページ図3)。電子ホワイトボードをプロジェクトで黒板に投影することで、生徒たちは自分たちのグループだけでなく、他のグループの考えに触れることができ、見落としていた表現に着目できたり、ま

映画『〇〇〇〇』の結末を考えよう
映画『〇〇〇〇』を鑑賞して、下の設問1～4について回答してください。

*必須

- 設問1 言葉やセリフ以外で、何か象徴的なシーン、印象に残ったシーンを教えてください(60文字以上) *
- 設問2 この二人(テルコと守)の結末はどうなると思いますか?(60文字以上) *
- 設問3 設問2で、なぜそう考えたのか、理由や根拠となる表現を教えてください。 *
- 設問4 なぜ映画のタイトルが「望がなんだ」だと思いますか?あなたの考えを教えてください(60文字以上) *

図1 映画鑑賞後に入力するアンケート

『ひよこの眼』の結末を考えよう
小説『ひよこの眼』について、下の設問1～5について回答してください。

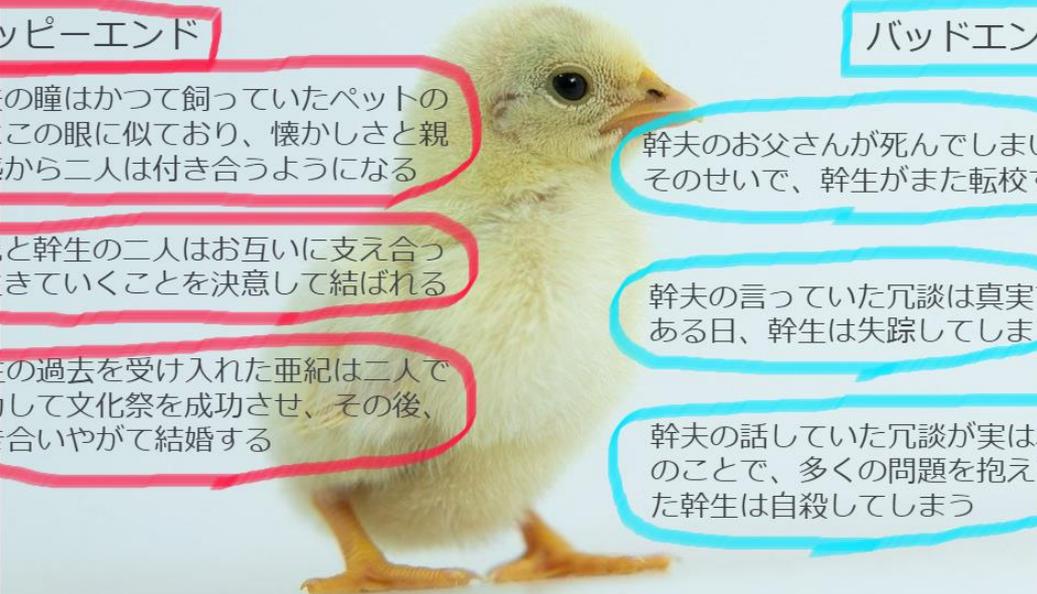
*必須

- 設問1 このあと(意味段落6)の結末をハッピーエンドver.で予想しなさい?(60～80文字程度) *
- 設問2 設問1で、なぜそう考えたのか、理由や根拠となる表現を教えてください。 *
- 設問3 このあと(意味段落6)の結末をバッドエンドver.で予想しなさい?(60～80文字程度) *
- 設問4 設問3で、なぜそう考えたのか、理由や根拠となる表現を教えてください。 *
- 設問5 小説『ひよこの眼』で、山田詠美さんのどのような表現が気に入りましたか?何でもいいので教えてください。 *

図2 小説の予想した結末を入力するアンケート

た作品に対する読みを深めることができたりした。

『ひよこの眼』の結末（意味段落6）を予想してみよう！



ハッピーエンド

幹夫の瞳はかつて飼っていたペットのひよこの眼に似ており、懐かしさと親近感から二人は付き合いようになる

亜紀と幹生の二人はお互いに支え合って生きていくことを決意して結ばれる

幹生の過去を受け入れた亜紀は二人で協力して文化祭を成功させ、その後、付き合いやがて結婚する

バッドエンド

幹夫のお父さんが死んでしまいそのせいで、幹生がまた転校する

幹夫の言っていた冗談は真実である日、幹生は失踪してしまう

幹夫の話していた冗談が実は本当のことで、多くの問題を抱えていた幹生は自殺してしまう

図3 生徒が予想した結末

5 考察

映画を副教材として用いた活動では、既習した内容を生かして表現の工夫や特長に着目できている生徒を確認できた。授業の振り返りとして行った「今回の授業で学んだことを整理して書き出してみよう」というアンケートでは、「他の小説や漫画や映画などにも『ひよこの眼』のように主人公の心情が細かく描写されていたりすること」「登場人物についての何気ない1文にも様々な表現の工夫が施された伏線が隠されていること」「物語は細かいところにも意識することでまた違った楽しみ方をするができるということ」「伏線を読み取り結末を考えることは、小説だけでなくマンガや映画などでもできることを学んだ」というように作者の表現の工夫や特長に着目できる生徒を見取ることができた。

また、グループ活動の話合いの中で、生徒が気付いた表現や予想した結末を発表し合う共有を行ったことで、読み手である生徒自身の読解力や読書経験の違いを埋めることができ、自分では気付かなかった表現にも意識が向くようになった。さらに、各グループの話合い活動の成果を電子ホワイトボードに入力することで、同じ結末を予想していても根拠とする部分が違っていたり、同じ表現に着目していてもそこから予想する結末が異なったりしていることを確認できた。この授業を通して、生徒は作品中の表現や叙述に着目した読み方が強化され、多面的・多角的な読み取りができるようになり、作品理解をより深めることができていた。

今回の授業では、表現の工夫や特長に着目し結末を予想するという活動を行った。そのため、一部の生徒は予想した結末が合っているかどうかという結果の部分に執着してしまい、主教材の中にある表現の発見とその効果について考えるというプロセスの部分が希薄になってしまった。そのような生徒に対しては、「単元でどんな力を身に付けるのか」ということを常に意識させる工夫が必要である。